

## 優秀賞

「100歳時代を生きる」

—「笑顔」寿命—

兵庫県立神戸高等学校 一年

大塚 はな

この世界の音は蝉と子どもの声だけで埋め尽くされているのではないだろうか、などと馬鹿げたことを考えてしまうほどの暑さの中、二年前、私は父と曾祖母に会いに行った。久しぶりの再会だった。私がそれまで曾祖母と言われて思い出すのは、私が踊るのに合わせて手をたたきながら穏やかに微笑んでいる姿だった。だから私は曾祖母を見たとき、シヨックをうけた。曾祖母は鼻から管を通して寝込んでいた。私たちが来ても、少し虚ろな目をこちらに向けただけで、ろくに会話もせずまたすぐに天井とのにらめっこを再開した。「生きる」って何だろう、そんなことを考えずにはいられなかった。その曾祖母も今年の六月に亡くなった。九十八歳だった。

はたして長生きすることは幸せなのだろうか。正直、私にはどうしてもそうは思えなかった。

朝のぼーっとした頭で論文のテーマをどれにしようかと眺めながら考えていると、「100歳時代」という言葉に目が留まった。目が覚める思いだった。別に特段、理由があったわけでもないが何か心にひっかかったので、どういう意味だろうという好奇心から調べてみた。調べてみて分かったことは、今の十代の五十パーセントが百歳まで生きると言われているということだ。もちろん、このことを聞いて喜ぶ十代もいるだろう。私はその意見を否定しないし、逆にそういう考え方をできる人を尊敬する。なぜなら、「今」を楽しんでいて「これから」に大きな希望を抱いている人にしかそんな考え方はできないと思うから。私は、五十パーセントが百歳まで生きるということをきいて、それはつまり、私たちは定年の六十歳まで働いたとしても、残りの四十年間はほんの少額の年金と今までの貯金をくずしながら生きていくことになるということだと思った。私はこの四十年という歳月をとっても長く感じた。お金を気にしながら生きる四十年、もし自

分の子どもに面倒をみてもらうことになれば、肩身の狭い思いをしながら生きる四十年、どちらにしても、私は長生きをすることへの否定的な考え方をより強めることになった。そんなとき私はあるものを思い出した。

「ねえ、これ読んでみて。」

そう言いながら母が指差したのは「通販生活」という雑誌の「百歳現役」という特集だった。この特集では名前のとおり、百歳近辺で今もなお活躍し続けている五人の方々が写真と共に載っていた。その職種は尺八奏者からダンサーまで様々だ。私は見せてもらったとき、すごいな、と思っただけですぐにその雑誌を返してしまった。

まだ残っているかな、と不安になりながら母に聞くと、  
「たぶん捨ててないと思うけど。」

といい、本棚の奥に見つけてひっぱりだしてくれた。読みなおしてみると以前見たときは気づきもしなかった、ある共通点が見えてきた。それは「笑顔」だ。私はこれに気づいたとき、百歳になってもこんなに笑えるものかと、とても驚いた。曾祖母のこともあったのでなおさらだ。私は思った。彼らは

幸せなんだと。それが分かったとき、私は彼らが幸せでないと決めつけていたことを恥ずかしく思った。長生きすることと幸せであることに因果関係はないのだ。百歳で寝たきりの人もいれば、毎日を楽しく過ごしている人もいる、それは私たち十代でも同じだ。

私は今長生きしたいともしたくなくとも思わない。そもそもそんなことを考えたところで何もはじまらない。私はただ人生を全うしたい。毎日笑ってすごしたい。「笑顔」でいられる寿命を伸ばしたい。ましてや、寿命と「笑顔」寿命が一緒だったらこんなに幸せなことはないだろう。私は笑っていられることが「生きている」ということだと思う。笑えなくなったらそれは「生きている」と言えないと思う。

「死ぬまで笑っていたい」

これが私の100歳時代の生き方だ。